

【目次】

連作

月に訊く・・・スコラブ

タイムスリップに失敗すると爆発する・・・迂回

夏のブリーダー・・・ナイス害

水分・・・加賀田優子

近況・・・はだし

短歌未満2

編集後記

月に訊く
スコラブ

濡れずに着いたものだけ座るのを許されているボックスシート

間違った絵など存在しないから力任せにマーカーを押す

笹の葉はどこにもなくてサラダバー　いつか帰るよ白磁に乗って

ミニトマト落とした場所が揺らぎだしきみは宇宙の起源であった

永遠に続くようだと言いついて窓の外だけ夜になっても

パーティーを横目で見ては苦笑してもうパーティーのひとりになった

月に訊く、そこからなにが見えていてそれは昔と変わりましたか

ある時間 t で同じ座標には a 、 b はないチャーハンもだ

待つときはあなたというかあなたのする移動を信じて目を閉じている

第一球振りかぶるって難しいでしょノーヒントじゃ あ、ヒントはあるんですか

十年前の通学路を車で通る 今ゾンビ出たら轢けるな

ピスタチオ砕いたときの感情 気のせいかなもうひとつ砕く

人はほぼ点として捉えてるんですが にしてもダンスはすごいですね

ダンスとは移動ではないらしいですどうですか星そちらの移動は

正月は不動であって触るとき丁寧にしなければならぬ

死んだら動かない 納得したら部屋に行く 心臓が鳴っていて恥ずかしい

灯台のまちへようこそ 名物は脂アスパラ 三つ編みガラス

夏のブリーダー
ナイス害

鳥の羽根はこうして雲をなでてから帽子のリボンに挿し込むやってみて鮮やかなジュラ紀が欲しい多摩川の光を破るあなたのみぎて

靴紐がほどけたら二つに分かれた言葉もきちんと結んであげて

柔軟剤をグラスに注ぎ見つめればこの洗濯機はオスだと思う

おいしいといえば玉こんにやくといえば広がる夢の中にいました

グラタン皿からはみ出たチーズだけ食べるちっぽけだったとしてもなんだよ

夏のブリーダーみたいにめくる歯並びが良いからここに歯型をつけて

たのしいの手話はたのしい心音と陽光がもう混ざり合ってる

身長差がどれだけあっても寝るときは頭で高さが揃うしめじふぉーゆー

マシユマロの製造マシーンを操作する夜勤の人の旅行記を聞く

ありがとう。日々を吊るしたピンチハンガーはないちもんめが出来なくなつて

グレンモーレンジィぼくは犬になる息をたくさん吐いて笑うよ

水分

加賀田優子

蟬をてのひらで潰そうとしてみても泣いているまひるの重なりかた

いくらでも乾く唇とむかいあう鏡は奥の奥から冷える

あいづちが不意に近づき産むように皿へと吐きだした果実の種

いままできちんとしめてこなかった蛇口からはいつまででも水滴とその音

太腿に指は触れている目の前の水溜まりをこどもは踏んでゆく

可愛がられたくってたまらない顔でずちゆりと水面をつきぬけてきた

近況

はだし

バスケットボールの上に立とうとして、るーんってなったことがあります

会社にはとてもお世話になってます 集合写真とか撮りました

水出しの日本茶がおいしくなってきました、そんな滝があればな

遠くから花火の音が届く もうそっちはみんな笑ってるよね

桃のために空けておいたスペースへ桃が入ってゆくよ 桃だよ

車を出すことになりました

「扇風機を捨てにいくっていうのにさ、サンダルはどうかと思うわけ」

飲み会は 頭よくないわたしへとみんなが追い付いてくる、どんどん

ひー、ヤンジャンで叩かないでと言っておきながらわたしは叩かれにいく

ひとりでもひとりっぽくないのはなんでだろう すいてる道っていいな

短歌じゃないけど、なんだか。
着地しそこねたような言葉が、
また少しずつ溜まってきましたので

2 短歌未満

宝石の味……純露

気品のあるスイートなキャンディと香り高い紅茶の味の、キャンディがペアーで入った、キャンディの傑作

「純露」という飴のパッケージ裏に書かれている商品説明です。

商品の良さを説明する言葉って、どこかのタイミングで「お口でシュワっと」みたいな描写か、一言でクスッとさせるようなユーモアのあるキャッチコピーか、になっていった気がします。商品をきちんと伝えたり、印象に残らせることを主目的としたものに。

でも純露は、そのどちらでもないです。なんだろう、昭和ロマンです。もう平成も終わるといふこの時代にこのフレーズ。「宝石の味」と、いきなりぶっこんでくる。そのイメージを壊さないまま「気品のある」「ペアー（ペアじゃない！ペアー！）で入った」「傑作」と、まるで高級ジュエリーの紹介文ような言葉が続きます。でもそう言われると、あの黄金色で角ばった形やシンプルな甘みが、紅茶の香りが、ほんとうに「宝石の味」なのではと思えてきます。

てか宝石って味しないよね。でも何かわかるんすよね。この何かわかる、は短歌にも通じる所があると思います。それを感じながら純露を舐めるとき、我々はあの甘みとともに昭和ロマンという喩を味わっているのではないのでしょうか。

すみませんでした。

（はだし）

フライパンで雪かきをする。卵焼き用が使いやすい。

雪かきをする道具がない場合の代用品というテーマのコラム記事からの抜粋。

ありがちな東京中心の目線からの記事なのだけど、実際に数年前にこういうことが行われていたという事実に基づいているのが面白い。

大雪が来る可能性はあるけれど、雪かきをする道具を常備するほどの頻度で降るわけでもないという環境で、日常使うものを代用品として考える。その条件のもとで、おそらくフライパンは比較的思いつきやすい代用品なのではないだろうかと思う。

「雪」と「フライパン」という本来ミスマッチな組み合わせが特定の条件下で生まれるということなのだが、自分にはこの「雪」と「フライパン」というふたつのモチーフがなんとも絶妙な距離感を持っているように思える。

「雪」と「フライパン」の間には飛躍がありつつも、それが荒唐無稽というわけでもなく想像の及ぶ範囲で繋がっている。雪という自然の美しさを持つモチーフと、フライパンという生活を感じさせるモチーフが重なったときに、少なくとも自分は、フライパンに美しさを感じ、雪に可笑しみも感じた。

コラムのそこから先の文を読むと、卵焼き用が使いやすいという、より具体的な示唆がされている。そう何度もあるかわからない特殊なケースの中で、よりやりやすい方法を見つけているのだ。

こうした無駄になるかもしれない発見というのも、詩的にはより貴重な体験のように思えて、その発見する行為にいともしきのようなものを感じるのであった。

(スコラブ)

死んだ君にわかるように地球より青い犬を飼おう(ぼく脳 @_bokunou 2013年5月2日ツイッターより)

こんなに切ないツイートを後にも先にも見たことがない。

このツイートにはイラストが添付されているのだけでも、自分よりも、死んだ君よりも、地球よりも、青い犬が一番悲しく感じてしまうのは、ぼく脳の絵のタッチのせいだろう。

青い犬の抜けた毛が風に舞ったらきっと綺麗だろうな。

数年前、ぼく脳デザインの東京カランコロンのTシャツをなぜか買ってしまっていて、なぜか部屋着として着ているんだけど、水色のボディに東京カランコロンのメンバーの肌色(顔の色)がめちゃくちゃ気持ち悪く色反応していて着るたびにウケている。

(ナイス害)

しっぽを バネがわりに して とびはねることで しんぞうを うごかしているの で とまると しぬ。(ポケモン図鑑 バネブー (ブラック2 / ホワイト2))

バネブーはググると普通に出てきますが、かわいげな豚にバネがくっついてるポケモンです。ポケモンはちよくちよくこういう悪ふざけみたいなそのまんまをやるけど、初代で遊んでたころは気づかなかつたんだ僕は。

ポケモン図鑑がけっこう怖い説明をしているというのも定期的にネットでウケるネタになっていて、そういうのに比べるとバネブーの説明はシンプルというか文脈を読む必要がない感じで、仕組みとして言ってることはわかりやすい。

何が短歌っぽいかといえば、文章そのもの以外の骨格で「そうだな」を担保してることです。これは図鑑の説明文で、これを参考にポケモンの世界の人たちはバネブーゲットだぜーとかやるわけです。図鑑の説明というのはそれが真実だという前提が強くある。短くてもなんか怪しい文章でもそれを信じるしかない。「とまると しぬ」。実際に。バネブーがほんとはいなくても、それは実際にしぬと思うしかない。

短歌でいうとその形・韻律に担保されるということになります。ポケモン図鑑の例でもそうですけど、されてるから短歌は常に真実とかそういうことではなく、その文章のみを見たときに自分の内側に発生される説得されたさの力が、その力を受けて自分がその方向を向く感覚が、なんだか似てるなということ、 「とまると しぬ」らしいバネブーを読んで、思いました。

(迂回)

づおんづおキャンキャンウバウツギャンギャンヴウンツヴオオオキャンツウウバウツ（ごづ、ごづ、ごづ、ごづ）

はやめに帰って、遠くのスーパーまであるく途中、ひらたくて横に長めの古いお家がある。

表札はない。木造。屋根とか、ポストとか、窓枠とか、いろんところがほんの少しずつ、壊れているようにみえる。

七時前ぐらいに通ることができれば、この音響なタイミング。

硝子戸のむこうは、いつもぼんやりとしか電気がついていない。最近はまだ夏だから、外のほうがぜんぜんあかるい。

ただの勘だけど、三匹と二頭、ぐらいいると思う。もしかしたら、声をださないものも、あとすこしぐらいいるのかもしれない。

ついでにこの勘は、これは、のぞきこんだらいけないほうのだよ、ともいつてくるので、たちどまったことはない。

ご飯の時間＝闘いなのが、ばきばきに伝わる。

つい最近のこと。夕暮れ未満のその戦場を、いつもの歩調で通り過ぎたあたりで、ふくよかなおばあさんと、そのおばあさんに手を引かれた女の子が前からあるいてきた。

おばあさんがふっくらしているからなのか、女の子がちいさいからなのか、ということを一瞬考えるバランスのふたり

。おばあさんの髪は真っ白で、夏の夕方のひかりにきれい。そして、女の子の髪はほんとうのまっくろ。ひかりがなくてもたぶんひかっているような黒だ。

そんなに狭い道ではないけれど、なんとなく急に狭く感じた。

おばあさんと女の子と私とウォンキャンバウバウでぎゅうぎゅうづめの瓶の中みたいだった。

だいたいすれ違う寸前、おばあさんの顔を見あげて、女の子が言った。

「なんかおるよ」

おばあさんは何も言わなかった。

女の子の方を向きもしなかった。

「ここなんかおるよ」

ねー、ねー、おるよ、と女の子の声だけがそのあとも続いて、ふたりは遠ざかっていった。

私はそのままスーパーに向かい、桃とコチュジャンを買って帰った。

帰りのそのお家は、いつだってなにもない、がずっと続いているみたいに静かだ。

これからもたまに通るだろうけれど、もうあのふたりには会わないのだろうな、と、思った。

（加賀田優子）

【編集後記】

企画の短歌未滿、1回目は2014年11月号でした。見較べてみると短歌っぼさ探しの様子の変遷がわかるかもしれません。短歌っぼさ探しの様子の変遷って何。時を経ていろんなものを短歌とを感じるようになっていくのか？といえばそんなことは別になく、短歌にできると思っていたものは別にしなくてよかったり、でもあのとき引いた線はそのまんま残ってたり、あれこれもしかしてもうそんなに「このかたまりは短歌」みたいなのって増えなかったりします？とも思うんだけど、まあ触っていくしかないですね素手で。

ところで僕ほんとうにお風呂とかで短歌を考えられなくて、お風呂ではお風呂をしようからなんですけど、じゃあ短歌をするには短歌をするしかないのではないか？ということになり、短歌を…する…？という状態になりがちです。短歌をできる一瞬をとらえていきたい。いきましようね。お風呂にも入りましよう。

2018年7月22日 迂回

「相槌がじょうずだね」になんて相槌するか迷っちゃった、おみょうが切ろっと――

執筆者

迂回 ([@ukaian](#))

加賀田優子 ([@0ccak](#))

スコラブ ([@scope_scape](#))

ナイス害 ([@NiceGuuuy](#))

はだし ([@hadashinomanmay](#))



なんたる星7月号

発行日：2018年7月24日

編集発行人：迂回

表紙：スコラブ

企画：はだし

Twitter：[@nantaruhoshi](#)